

昭和十三年～十六年 旧西谷村青年学校の指導員

昭和十七年 西谷村在郷軍人分会長

西谷村陸軍対空監視所所長

戦後は地域の森林組合、特産物加工組合などの理事等を務め、平成元年には大野郡市軍恩連盟事務局長に就任、現在に至る

(福井県 天谷 小之吉)

シベリア抑留記

長野県 長 田 伊三男

昭和二十年八月十五日、敗戦。私たちの所属する部隊は、奉天北陵大学に集結、ソ連軍の指揮下に捕虜となり、九月中旬、国境の町、黒河に移動しました。

町は戦いで焼かれ、線路は曲がり、砲弾はごろごろと転がっていて、戦闘の物凄さを物語っていました。

ここで十日間くらい待機させられ、その間、食糧その

他物資の積み込み作業の労務に使われました。黒龍江の上流で河幅は二〇〇メートル余、その水量と急流は物凄く、ソ連の貨物船が対岸まで横づけできないので、その間十五メートルくらい、板の棧橋をかけて自分の体重より重い七十キログラム入りの高梁や砂糖袋を積み込むのです。こたえました。その上、棧橋は狭いし揺れる、ふらついて落ちれば黒龍江の藻屑、命懸けの仕事でした。

十日ほどして、九月下旬頃だったと思いますが、私たちは、黒龍江を船で渡りブラゴエンチェンスクへ着きました。ソ連領上陸の第一歩です。港から汽車の駅までしばらく歩き乗車しました。「ヤボンスキー・ダモイ」(日本人・帰国)とソ連の兵隊に騙されているのにも知らず、それを信じて貨物車に乗り込みました。中は二段に仕切られていて、ぎっしりと詰め込まれました。これでは寝ることもできない、まるで豚かにかのよう。とても人間の輸送ではありませんでした。「汽車よ東へ走れ、そして日本へ少しでも近づけ」私たちの願いもむなしく、汽車は西へ西へと走り続けま

した。

何処へ、また何時に止まるかわからないので、走行中の用便には困りました。小便はまだよいが大便は危険、ロープに纏まり尻を外に出してすませました。落ちれば一卷の終わりです。日本ダモイは、もうみんな諦めていました。騙されていたこともわかりました。

汽車はそれから、シベリア第一の都市イルクーツクを経て、バイカル湖のほとりへ出ました。バイカル湖は、日本の本州・九州がそっくり入るくらい大きな湖であるという。ここを抜けるのに一昼夜くらいはかかったと思います。まるで海のようにでした。航行している大きな汽船、波のうねり……。

出発してからもう八日は過ぎた頃でしょうか。皆疲れてきました。私の車両から病人が出始めました。一人は四〇度も熱が出てうわ言をいう。皆で一生懸命看病しましたが、二日目にととうとう亡くなってしまいました。まだ若い初年兵でした。

〈魂は 一足先に ダモイする〉

汽車は、更に西へ西へと山林の中、野を越え小さな

町を幾つか過ぎて、昼夜を分かつず走り続けました。

私たちには何処まで行くのか少しも分かりません。

十一日目頃だと思っています。汽車は小さな町の駅に着きました。ここを私たちが、それから四年余にわたって、飢えと酷寒と重労働で、全く生と死の境を明け暮れするチェレンホーボの町で、ドカンドカンとハッパの音のする人口二万くらいの炭坑の町でした。

六つのラーゲル（収容所）があり、私たちは第四ラーゲルに収容されました。もう日本ダモイの夢はいつのことやら、あの精鋭の北支派遣軍も見つからない情景でした。収容所は小高い丘の上にあつて、大きな露天掘りの炭坑が眼下に見られ、四五〇〇人の収容人員でした。

収容所は古い木造の建物で今まで何に使用していたのかわかりませんが、半地下式で窓の所まで土に埋まり寒さをよけ室内保温をする二重式のガラス窓で、室内には木造で簡単な二段ベッドがぎっしりと並べてありました。ペーチカがあり、外は零下四〇度でも中は暖かでした。

広い收容所の周りには、三重に高い鉄条網が張りめぐらされ、電流が流れる電線が張られていました。四カ所の角には、高い見張り小屋があつて、夜はサーチライトが照らされ、自動小銃を持ったソ連兵が、昼夜監視していました。

〈皇軍も 変われば変わる この姿〉

〈捕虜の身は この垣一つで ままならぬ〉

到着してから一週間くらいは作業に出ず、身体検査をして体力に応じ等級をつけられました。一級、二級、三級、OKの四段階で、一級、二級は重労働作業、三級は軽い作業で、OKは所内の使役作業でした。

〈尻肉を チョットつまんで ハイ三級〉

長い間汽車の中で入浴もできず、衣服の洗濯もできなかったもので、いつか知らぬ間に皆シラミがわいていました。所内には水道もなく水も運搬によりまかなくなっていたので、入浴もたまにしかできませんでした。

作業に疲れて夜になつても、シラミや南京虫が多くてなかなか眠れない。暗い電気の下、みんなでシラミ

を取りました。ペーチカの上でシャツをはらうと、パチパチとシラミが焼け死ぬ音がしました。

初めてのシベリアの冬。十二月ともなれば、零下三十度以下の日が続きます。十五人くらいの班編成で作業班をつくり、炭坑の重労働に毎日駆り出されました。朝出発の時は三十分も前から收容所の門前に整列させられて、順番を待ちました。手も足も体も寒さで凍りつくよう、一年目の冬は体が慣れていないのでこたえました。

その頃から、発熱の病人が收容所の中に出始めました。四〇度もの熱が出る発疹チフスです。收容所の中に隔離病棟を作り、病人を收容しました。しかしシラミの媒介により、患者はたちまち千人、二千人、三千人と増え続け、作業も中止になりました。十二月末には患者の数は四千人にもなりました。

ソ連政府も医者・看護婦合わせて百二、三十人も動員して、看護に当たってくれましたが、患者は四〇度も熱を出して苦しがる、食事も取れない、「水をくれ、水をくれ」と叫ぶ。水を飲めば下痢になり、ばたばた

と毎日死んでいきました。その戦友の亡骸は真ッ裸にして、死体置場に積み重ねました。見る見る間にかんかに凍っていきます。

〈目が覚めて 見れば隣の 友は死に〉

〈遺書一つ 書く気力なく 死んでゆく〉

翌朝は、その戦友の亡骸を馬そりに乗せて、少し離れた小高い丘まで運びます。そして、ここで穴掘りです。この穴掘りも零下三、四〇度の寒さの中では容易でなく、土も一メートルも深く凍っています。鉄棒を焼いて打ち込み、そこに火薬を入れて爆破させては穴を掘り、亡骸は一緒に重ねて葬りました。このようにして二月中に四百五十人余りの死者が出てしまいました。まさに生き地獄です。今、思い出しても身震いがかかります。悪夢でした。二月も下旬になってさしもの発疹チフスも下火となり患者の数も減って次第に治まってきました。

また野外作業が再開されます。チェレンホーボの町の周りは炭坑ばかりで、露大掘り、地下掘り合わせて十六もの炭坑がありました。石炭掘り、鉄道建設土木

工事と昼夜兼行で作業が続けられました。作業ノルマがあるので一〇〇パーセント達成するまで監督に「ダワイ、ダワイ（早く、早く）」で働かされました。

〈男でも 泣きたくなるよ このつらさ〉

三〇〇グラムの黒パンと三〇〇グラムの麦が、一日分の食糧として支給されただけでした。馬鈴薯の穫れる時期には、十日間も薯ばかりです。作業に出た時に、野の草を手当たり次第に取って持ち帰り、飯ごうで煮て食べました。町のマンホールの泥をさらい、薯や野菜の屑を拾い上げて、腹の足にしたこともありました。人間これ以下の生活は、おそらくないと思えました。

〈腹三分 後の七分は 草を喰い〉

寒い冬の真夜中、「貨物列車が着いたぞ」と言って起こされては坑木下ろしに駆り出されたこともありました。

深夜、遠くから聞こえてくる汽車の汽笛で「故国へ帰りたい」という故郷への郷愁を一層駆りたてられました。そして一枚の毛布に夢見る——故郷の山・川・

家族の顔・顔。

このように望郷と、はかない帰国への悲願をこめて過ごした酷寒の地シベリア――。

こうして四年余の歳月が、めぐり来たり、そして去って行きました。

へスコーラ スコーラ ダモイ ダモイで四冬過ぎ

私たちが引揚船に乗り、夢にまで見た懐かしの故国、舞鶴港に着いたのは、昭和二十四年九月二日のことでした。

光陰矢の如し、悪夢のような大東亜戦争が終わって、あつという間に五十年近い月日が過ぎ去りました。この間私たち五十七万、かつてのソ連抑留者は、あの言語に絶する苛酷な強制労働を、一日も忘れることはできません。

北支の山野に散っていった戦友、酷寒の地シベリアで飢えと寒さのために亡くなり、今も凍土の下、祖国を夢見て眠る多くの友のことを思い、その方々のご冥福を祈って筆を止めます。

【執筆者の紹介】

執筆者と私は同年兵です。

長田伊三男氏は、大正十二年十一月十二日、農家の三男として生まれた。

十八年、兵隊検査で第一乙種合格。

十九年一月十日、高崎歩兵第百十五連隊に現役兵として入隊。

十九年二月、博多港出帆、朝鮮釜山上陸、満州通過北支に入る。北支派遣軍陣第四二八六部隊独立歩兵第二十五大隊四中隊入隊、河南作戦参加。

昭和二十年五月、満州通遼に到着。

敗戦捕虜となり、九月、シベリアに送られる。チェレンホーボ収容所で四年間労働。

二十四年九月一日、舞鶴引揚上陸。自家で農業を営み、公職を多く務める。

(長野県 高嶋 利春)